九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[010] 文獻探究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10119

出版情報：文獻探究. 10, 1982-09-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

既刊号分類総目録

古代

『とりかへばや物語』四の君密通事件・続攷　四号（三五）　辛島正雄
研究余滴　引歌と成立年代　五号（一四）　〃
「べらなり」の和歌　―古今後撰時代の場と表現―　六号（一一）　工藤重矩
「くれたけのよなかさをきりて」考―『大和物語』一四七段補注―　七号（一二）　佐藤恵美子
九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について　四号（一四）　田坂憲二
九州大学文学部蔵『伊勢物語能愛抄』について　六号（一〇）　〃
九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について　四号（二六）　中條順子

中世

『風に紅葉』物語覚書（一）　八号（三九）　辛島正雄
『風に紅葉』物語覚書（二）　九号（一九）　〃
『新撰六帖題和歌』初句索引　三号（二二）　田坂憲二

近世

秋成の一首・成美の一句―その筆蹟と解説―　九号（一一）　市場直次郎
九大図書館蔵『寛文五　乙巳記』―翻刻と解題―　五号（三六）　井上敏幸
『去来抄』と異本『落柿舎遺稿』―俳書管見(一)―　九号（五）　大内初夫
中島広足往来抄（一）　二号（五）　白石良夫
中島広足往来抄（二）　四号（四）　〃
中島広足往来抄（三）　五号（二二）　〃
中島広足往来抄（四）　六号（二五）　〃
中島広足往来抄（五）　七号（一八）　〃
中島広足往来抄（六）　八号（五〇）　〃
中島広足『倭歌諸説』翻刻　九号（一〇）　〃
『金々先生後日夢不物好持たが病』―翻刻と解題―　五号（五八）　園田豊
怪異本『宿直座頭』報告　五号（一五）　花田富二夫

近代

藤村の逸文　一号（三）　瓜生清
「詩の青春」―朔太郎と犀星の交流―　萩原朔太郎年譜考(一)　七号（一）　國生雅子
評伝　矢田津世子（一）　一号（一七）　花田俊典
評伝　矢田津世子（二）　二号（四二）　〃
評伝　矢田津世子（三）　五号（二九）　〃
評伝　矢田津世子（四）　六号（三五）　〃
評伝　矢田津世子（五）　八号（五六）　〃

『定本坂口安吾全集』（冬樹社）未収録資料　一号（七）　花田俊典

資料　坂口安吾「意欲的創作文章の形式と方法」
――『定本坂口安吾全集』未収録資料――七号（二五）　〃

国語学

日本霊異記下巻序の訓読　三号（一三）　秋吉（小野）望

宣命の呼称――続日本紀から三代実録まで――　九号（二五）　小野望

『日葡辞書』の連濁について　五号（六）　木部暢子

言語地図の一解釈――「捨てる」の九州方言――　八号（一五）　〃

豊前方言アクセント――二拍2類名詞――　九号（三三）　〃

「大蔵流狂言秘本」のことばの性格　五号（一）　坂口至

助動詞ヨウの成立以前　八号（一）　〃

近世末期の文献と方言史研究　一号（九）　崎村弘文

『日本霊異記』の序・再考　二号（三一）　〃

資料紹介　古今和歌集聞書　三号（七〇）　〃

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について（一）　五号（四四）　〃

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について（二）　六号（四七）　〃

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について（三）　八号（二六）　崎村弘文

御伽草子の表記体系（一）　九号（四六）　〃

戯作の唐音かな表記　二号（一七）　矢野準

「目から鼻へ抜ける」話　三号（三）　吉田達

雑

資料と私　一号（一）　今井源衛

今井源衛教授所蔵フィルム目録（抄）　一号（二六）　〃

文庫訪問の心得（一）　二号（三）　〃

文庫訪問の心得（二）　三号（一）　〃

文庫訪問の心得（三）　四号（一）　〃

文庫訪問の心得（四）　五号（八二）　〃

文庫訪問の心得（五）――カメラの使用について――　六号（七一）　〃

文庫訪問の心得（六）　七号（六〇）　〃

研究室のあれこれの事（一）　八号（七八）　〃

研究室のあれこれの事（二）　九号（六〇）　〃

研究室を後に　二号（一）　春日和男

国宝古筆手鑑「大手鑑」「翰墨城」「藻塩草」「見ぬ世の反」対照表　七号（三三）　田坂憲二

蔵書目その一　露伴翁著書　一号（三三）　中野三敏

蔵書目その二　国字解もの　二号（五二）　〃

蔵書目その三　仏法勧化モノ　三号（六五）　〃

蔵書目その四　近世木活　四号（四五）　〃

蔵書目その五　邦人法帖その一　五号（七四）　〃

蔵書目　その六　邦人法帖その二　六号（五九）中野　三敬
蔵書目　その七　邦人法帖その三　附和刻法帖・書論・書学　七号（四七）〃
蔵書目　その八　詩学書　見てから読むか…　書評　近世新畸人伝漫言　八号（六九）〃　三号（一二）花田俊典　二号（六一）森　銑三

今井源衛先生著『国文学やぶにらみ』に寄せて

本誌創刊号（昭和五十二年八月）から第七号（昭和五十五年十二月）まで、足かけ四年、七回にわたって御執筆いただいた今井源衛先生の「文庫訪問の心得」（創刊号では「資料と私」と題しておられるが、内容的にはひとつづきのものである）が、先生の御近著『国文学やぶにらみ』（昭和五十六年五月・和泉書院刊・一六〇〇円）に一括して収録された。本誌掲載の文章がはじめて著書の一部を成したもので、御著者である先生のおよろこびはもとより、会員一同にとっても、まことに画期的なはれがましいことである。

元来この御文章は、日頃何かにつけて粗相の多い私ども教え子に、文献調査にあたっての実地的な心構えを伝授していただくための、かなりプライベートなものであったような気がするのである（そもそも本誌の発足自体が、会員相互のいわば情報交換誌のようなつもりであったのだ）が、戦後の源氏学を領導し、文芸学と文献学とのみごとな統合・両立をなされた先生の御発言として、各方面での反響は予想を上回るものがあった。「文献探究」なるやや耳馴れない誌名が多くの方々の記憶の片隅にとどめていただけるようになったのも、この先生の一連の御文章に負うところ、甚大であった。先生の御文章を読みたいからとの問い合わせをいただいたことも、一再ならずあったことである。

その間、本誌も、会員の増加とともに、徐々に研究誌としての内実を整えてきたと確信するが、そこには、一刻も早く、先生の御文章に寄りかかって多くの方々に見ていただくのではなく、本誌の中核たる会員の論文自体で研究誌としての位置を定着させたいとの気持が強くはたらいていたように思う。してみると、先生の御文章は、私どもの大きな発奮剤でもあったわけで、対外的にも対内的にも、本誌は先生によって育まれてきたと申して過言ではない。

その先生は、本年四月一日を以て、この九州大学を定年のため去られることになった。日々先生に接し御教導いただくことができなくなるのは大きな痛手ではあるが、幸い先生には当地福岡を永の栖処と定められたこともあり、折にふれ今後とも御指導いただけるのは、何よりも心強いことである。私ども会員一同も、倍旧の努力で、先生の学恩に報じ、本誌をより一層発展させていく覚悟である。

（辛島記）